

四十年前

——新文学の曙光——

内田魯庵

青空文庫

アメリカの排日案通過が反動団体のヤツキ運動となつて、その傍^{そばづえ}杖^{はびき}が帝国ホテルのダンス場の剣舞隊闖入となつた。ダンスに夢中になつてゐる善男善女が刃引^{なまくら}の鈍刀^{おど}に脅かされて、ホテルのダンス場は一時暫らく閉鎖された。今では余熱^{ほとぼり}が冷めてホテルのダンス場も何カ月^{つき}ぶりかで再び開かれたが、さしみに流行したダンス熱は一時ほどでなくなつた。一時は猫も杓子も有頂天になつて、場末のカフェでさえが蓄音機^{こころえ}のフォックストロットで夏の夕べを踊り抜き、ダンスの心得^{こころえ}のないものは文化人らしくなかつた。

が、四十年前のいわゆる鹿鳴館時代のダンス熱はこれどころじゃなかつた。尤^{もつと}も今ほど一般的ではなかつたが、上台閣^{かみだいかく}の諸公から先きへ立つて浮れたのだから上流社会^{たちま}は忽ち風靡^{ふうみ}された。当時の欧化熱の急先鋒たる公伊藤、侯井上はその頃マダ壮齡の男盛りだったから、啻^{ただ}だ国家のための政策ばかりでもなくて、男女の因襲の垣を撤した欧俗社交がテンと面白くて堪らなかつたのだらう。搗^かてて加えて渠^{かれ}らは貴族という条、マダ出来立ての成上りであつた。一千年来の氏族政治を廃して、藤氏の長者に取つて代つて陪臣内閣を樹立したのは、無爵の原敬が野人内閣を組織したよりもヨリ以上世間の眼^{みは}を睜^{みは}らしたもので、この新鋭の元氣で一足飛びに欧米の新文明を極東日本の蓬萊仙洲に出現しようと計画した

その第一着手に、先ず欧化劇の本舞台として建設したのが即ち鹿鳴館である。今でこそ樟しょうのうようのくき 脳のう 臭くさいお殿との様の溜たまりの間たる華族会館に相応ふさわしい古風な建造物であるが、当時は鹿鳴館といえは倫ロンドン敦パリ巴黎の燦爛たる新文明の榮華を複現した玉うてなの台であつて、鹿鳴館の名は西欧文化の象徴シンボルとして歌われたもんだ。

当時の欧化熱の中心地は永田町で、このあたりは右も左も洋風の家屋や庭園を連接し、瀟しょう洒しやな洋装をした貴婦人の二人や三人に必ず邂逅であつたもんだ。ダアクの操あやつり人形にぎやうぜ然んと妙な内鰐うちわにの足どりでシャナリシャナリと蓮歩を運ぶものもあつたが、中には今よりもハイカラな風をして、その頃流行はやつた横乗りで夫婦轡くつわを駢ならべて行くものもあつた。このエキゾチックな貴族臭い雰囲気かすみせきに浸りながら霞かすみが関せきを下りると、その頃練兵場であつた日比谷の原を隔てて鹿鳴館の白い壁からオーケストラの美しい旋律が行人を誘そそつて文明の微醺を与えた。今なら文部省に睨ひんまれ教育界から響ゆく 蹙すくされる頗る放胆な自由恋愛説が官学の中から鼓吹され、当の文部大臣の家庭に三角恋愛の破綻を生じた如き、当時の欧化熱は今どころじゃなかつた。

先年侯井上が薨こうきよ去した時、侯の憶い出咄ばなしとして新聞紙面を賑わしたのはこの鹿鳴館の舞踏会であつた。殊ことに大臣大將が役者のように白粉を塗り鬢みづらを着けて踊つた前代未聞の仮

装会は当時を驚かしたばかりじゃない。今聴いてさえも余り突拍子とつびょうしもなく、初めて聞くものには作り咄うたとしか思われないだろう。

何しろ当夜の賓客は日本の運命を双肩に荷う国家の重臣や朝廷の貴紳ばかりであつた。

主人側の伊井公侯が先ず俊輔しゅんすけ聞多もんたの昔しに若返つて異様の扮装に賓客をドツと笑わし

た。謹厳方直容易に笑顔を見せた事がないという含雪將軍が緋ひ緘おとしの鎧に大身おおみの槍を横た

えて天晴あつぱれな武者ぶりを示せば、重厚沈毅な大山將軍ですらが丁ちよう髷まげの鬘かみしもに袴はかまを着けて

踊り出すという騒ぎだ。ましてやその他の月卿雲客、上臈貴嬪ふとつちよらは肥まつ満かぜの松風村

雨めや、瘦身やせつばちの夷えびす大黒だいこくや、渋紙面しぶかみづらのベニスの商人や、顔を赤く彩えどつたドミノの

道化役者や、七福神や六歌仙や、神主や坊主や赤ゲツトや、思い思いの異装に趣向を凝ら

して開闢以来の大有頂天だいうちやうてんを極めた。

この一夜の歓樂が満都を羨殺し笑殺し苦殺した数日の後、この夜、某の大臣が名状すべからざる侮辱を某の貴夫人に加えたという奇怪な風説が忽ち帝都を騒がした。続いて新聞の三面子は仔細しさいありげな報道を伝えた。この夜、猿芝居が終つて賓客が散じた頃、鹿鳴館の方角から若い美しい洋装の貴夫人が帽子も被らず靴も穿かず、髪をオドロと振ふり乱みだした半狂乱ていの体でバタバタと駈けて来て、折から日比谷の原の端はすれに客待ちしていた俤くるまを呼

留め、飛乗りざまに幌を深く卸させて神田へと急がし、只ある伯爵家の裏門の前で俵を停めさせて、若干そこばくの代を取らずや否や周章あわてて潜門くぐりの奥深く消えたという新聞は尋常事ただごとならず思われて、噂は忽ち八方に広がった。歓楽湧くが如き仮装の大舞踏会の幕が終ると、荒涼たる日比谷原頭悪鬼に追われる如く逃げる貴夫人の悲劇、今なら新派が人気を呼ぶフィルムイルムのクライマックスの場面であつた。

風説は風説を生じ、弁明は弁明を産み、数日間の新聞はこの噂の筆を絶たなかつたが、いくばくもなく風説の女主人公たる貴夫人の夫君が一足飛びの栄職に就いたのが復たまたもや疑問の種子となつて、喧々囂々の批評が更に新らしく繰返された。

が、風説は雲を攫むように漠然として取留めがなく、真相は終に永久に葬むられてしまつたが、歓楽極まつて哀傷生ず、この風説が欧化主義に対する危惧と反感とを長じて終に伊井内閣を危うするの蟻穴となつた。二相はあたかも福原の栄華に驕る平家の如くのろに咀くまれた。

伊井公侯を補佐して革命的に日本の文明を改造しようとしたは当時の内閣の智囊なからといわれた文相森有礼であつた。森は早くから外国に留学した薩人で、長の青木周蔵と列んで渾身しみわたに外国文化の浸潤しみわたつた明治の初期の大ハイカラであつた。殊に森は留学時代に日本語

廃止論を提唱したほど青木よりも一層徹底して、剛毅果斷の氣象に富んでいた。

青木は外国婦人を娶ったが、森は明治の初め海外留学の先駆をした日本婦人と結婚した。式を挙げるに福沢先生を証人に立てて外国風に契約を交換^{とりかわ}す結婚の新例を開き、明治五、六年頃に一夫一婦論を説いて婦人の権利を主張したほどのフェミニストであつたから、身文教の首班に座するや先ず根本的に改造を企てたのは女子教育であつた。

優美よりは快活、柔順よりは才発、家事よりは社交、手芸よりは學術というが女に対する渠^{かれ}の註文であつた。この方針から在来の女大学的主義を排して高等學術を授け、外国語を重要課目として旁^{かたわ}ら洋楽及び舞踏を教え、直轄女学校の学生には洋装せしめ、高等女学校には歐風寄宿舎を設け、英国婦人の監督の下に歐風生活を実習させて、日本の女をして一足飛びに西洋の女たらしめようと教育した。

文相既にかくの如くだから、女学校の先生たちは盛んに男女交際を鼓舞し、結婚の自由を主張し、男女の学生が自由に往来するを少しも干渉しないのみならず、教師自身が率先して種々の名目の下に青年男女を会同し、自由に野方図に狎戯^{ふざ}け散らすのを寛大^{おほめ}に見た。随つて当時の女学校の寄宿舎の応接室に青年学生の姿を見ない日はなかつた。通学生の待合室にすらも若い学生がしばしば出入した。学生の俱樂部^{クラブ}や青年の会合には必ず女学生が

出席して、才色あるものが女王クイーンの位置を占めていた。が、子女の父兄は教師も学校も許す以上はこれを制裁する術がなく、呆然として学校の為すままに任して、これが即ち文明であると思っていた。

自然女学校は高砂社をも副業とした。教師が媒酌人となるは勿論もちろん、教師自から生徒を娶めとる事すら不思議がられず、理想の細君の選択に女学校の教師となるものもあつた。或る女学校では女生の婚約の夫が定まると、女生は未来の良人を朋友の集まりに紹介するを例とし、それから後は公々然と音信し往来するを許された。女流の英文学者として一時盛名を馳せたI夫人は在学中二度も三度も婚約の紹介を繰返したので評判であつた。

突飛なるは婦人乗馬講習所が出来て、若い女の入門者がかなりに輻湊した。瀟洒な洋装で肥馬に横乗りするものを其処そこら中で見掛けた。更に突飛なのは、六十のお婆ばアさんまでが牛に牽かれて善光寺詣りで娘と一緒にダンスの稽古に出掛け、お爨さんどんまでが夜業よなべの雑巾刺んさしを止めやにして坊ちゃんやお嬢さんを先生に「イット、イズ、エ、ドッグ」を初めた。

いよいよ出でて益々突飛なるは新学の林大学頭たるK博士の人種改良論であつた。日本の文化を根本的に革新するには先ず人種を改造するが先決問題であるというのが博士の論旨で、人種改良の速成法として欧米人との雑婚を盛んに高調した。K博士の卓説ごりやくの御利生で

もあるまいが、某^{なにがし}の大臣の夫人が紅毛碧眼の子を産んだという浮説さえ生じた。

何の事はない、一時は世を挙げて欧化の魔術にヒプノタイズされてしまった。が、暫らくして踊り草^{くたび}臥れて漸く目が覚めると、苦々しくもなり馬鹿々々しくもなった。かつこの猿芝居は畢竟するに条約改正のための外人に対する機嫌取であるのが誰にも看取されたので、かくの如きは国家を辱かしめ国威を傷つける自卑自屈であるという猛烈なる保守的行動を生じた。折から閣員の一人隈山子爵が海外から帰朝してこの猿芝居的欧化政策に同感すると思いの外慨然として靖献遺言的の建白をし、維新以来二十年間沈黙した海舟伯までが恭謹なる^{そつろうぶん}候文の意見書を提出したので、国論忽ち一時に沸騰して日本の危機を絶叫し、舞踏会の才子佳人はあたかも阪東武者に襲われた平家の公達上臈のように影を潜めて屏息した。さすがに剛情我慢の井上雷侯も国論には敵しがたくて、終に欧化政策の張本人としての責を引いて挂冠したが、潮の如くに押寄せると民論は益々政府に肉迫し、易水剣を按ずる壮士は慷慨激越して物情^{きようきよう}洶々、帝都は今にも革命^{ちまた}の巷とならんとする如き混乱に陥った。

機一発、伊公の著名なる保安条例が青天霹靂の如く発布された。危険と目^{もくさ}指れた数十名の志士論客は三日の間に帝都を去るべく敝命された。明治の酷吏伝の第一頁を飾るべき時

の警視總監三島通庸^{みらつね}は遺憾なく鉄腕を発揮して蟻の這う隙間^{すきま}もないまでに厳戒し、帝都の志士論客を小犬を追払うように一掃した。その時最も痛快なる芝居を打って大向うを唸らしたのは学堂尾崎行雄であった。尾崎は重なる逐客の一人として、伯爵後藤の馬車を駆りて先輩知友に暇乞いしに廻ったが、尾行の警吏^{くるま}が俥^{しりめ}を飛ばして追尾し来るを尻目に掛けつつ「我は既に大臣となれり」と傲語したのは最も痛快なる幕切れとして当時の青年に歓呼された。尾崎はその時学堂を愕堂と改め、三日目に帝都を去るや直ちに横浜埠頭より乗船して渡欧の途に上った。その花々しい神速なる行動は真に政治小説中の快心の一節で、当時の学堂居士の人氣は伊公の悪辣なるクーデター劇の花形役者として満都の若い血を沸かしたもんだ。

先年侯井上が薨去した時、当年の弾劾者たる学堂法相の著書『経世偉勲』が再刊されたのは皮肉であった。『経世偉勲』の発行されたのはあたかも侯井上の欧化政策時代であつて、その頃学堂はジスレリーに私淑しているという評判だった。が、政治家としての尾崎は相応に見識があつたろうが、ジスレリーを私淑するには学堂の文藻は余りに貧しかった。尤も日本の政治家に漢詩以外の文学の造詣あるものは殆んどなかったが、その頃政治家が頻^{しき}りと小説を作る流行があつて、学堂もまた『新日本』という小説染みたものを著わした。

余り評判にもならなかったが、那翁三世が幕府の遣使栗本に兵力を貸そうと提議した顛末を夢物語風ゆめものがたりふうに書いたもので、文章は乾枯ひからびていたが月並な翻訳伝記の『経世偉勲』よりも面白く読まれた。『経世偉勲』は実は再び世間に顔を出すほどの著述ではないが、ジスレリーの夢が漸く実現された時、その実余人の抄略したものを尾崎行雄・・・・と頗る御念ごねんの入った銘を打って、さも新しい著述であるかのように再刊されたのは、腕白時代の書かき初めが麗々しく表装されて床の間に掛けられるようなものだ。学堂居士に取っては得意でもあろうがくす撥ぐったくもあろう。

今の学堂夫人テオドラが初めて日本の父の家に帰って来たのも丁度『経世偉勲』が発行されて若い学堂の澆漓たる意気が青年の思慕の中心となった頃であった。が、日本へ帰ったばかりのテオドラ嬢は日本の民間党の領袖に母国の大政治家ジスレリーを私淑する花形役者があるのを少しも知らなかったろうし、またこの和製ジスレリーが未来の良人となる事を少しも予期しなかったろう。噂だから虚実は解らぬが、当時のテオドラ嬢は日本の父の家庭が本国で想像したとは案に相違したのを満足出来なかったそうだ。英人のホームを見馴れた眼には一家の夫人ともあろうものが酒飯の給仕をしたり、普通の侍婢と見えない婦人が正夫人と同住している日本の家庭が不思議でもありまた不愉快で堪らなかったそう

だ。^{こと}殊にテオドラ嬢の父は元老院議官であつたが、英国のセネートアの堂々たる生活ぶりから期待したとは打つて變つた見^み窶^{すぼ}らしい生活が意に滿たないで、不滿のある度に一々英國公使に訴え、公使がまた一々取次いで外相井侯に苦情を持込むので、テオドラ嬢の父は事毎に外相からの内諭で娘の意を^{むか}響えるに汲々として弱り抜いていたが、欧化心酔の伊井公侯もこれには頗る困らされたそうだ。

当時の欧化は木下藤吉郎が清洲^{きよす}の城を三日に築いたと同様、外見だけは如何にも文物燦然と輝いていたが、内容は破綻だらけだった。仮装会は^た啻だ鹿鳴館の一夕だけでなくて、この欧化時代を通ずる全部が仮装会であつた。結局失態百出よりは滑稽百出の喜劇に終つた。が、糞泥汚物を押流す大汎濫は減水する時に必ず他日の養分になる泥沙を残留するやうにこの馬鹿々々しい滑稽欧化の大洪水もまた新しい文化を萌芽するの養分を残した。少なくとも今日の文芸美術の勃興は歐洲文化を尊重する当時の氣分に発途した。

井侯が陛下の行幸を鳥居坂の私邸に仰いで団十郎一座の劇を御覽に供したのは劇を賤視する従来の陋見を破つて千万言の論文よりも芸術の位置を高める数倍の効果があつた。井侯の薨去当時、井侯の逸聞が伝えられるに方つて、文壇の或る新人は井侯が団十郎を愛して常にお伴^{とも}につれて歩いた^{あきた}というを慊^{あきた}らず思ひ、団十郎が井侯をお伴^{とも}にしな^せいまでも切め

ては対等に交際して侯伯のお伴ともを榮としない見識があつて欲しかったといった。今日の文人の見識としてはさもあるうが、今から四十年前——あるいは今日でもなお——俳優が大臣のお伴ともをするは社会の实情上決して屈辱ではなかつた。かつ、井侯は団十郎をお伴につれていても芸術に対する理解があつたは、それまで匹夫匹婦の娯楽であつて士太夫の見るまじきものと侮蔑さげすんだ河原者の芸術を陛下の御覧に供したのでも明かである。今から見れば何でもないように思うが、四十年前俳優がマダ小屋者こやものと称されて乞食非人と同列に賤民視された頃に渠らの技芸を陛下の御眼に触れるというのは重大事件で、宮内省その他の反対が尋常ひととおりでなかつたのは想像するに余りがある。その紛々たる群議を排して所信を貫徹したのは井侯の果敢と権威とがなければ出来ない事であつて、これもまた芸術を尊重する欧米文明の感化であつたろう。

劇を文化の重要件として演劇改良が初めて提言されたのもまた当時であつた。陛下の天覧が機会となつて伊井公侯の提撕ていせいに生じたのだから、社会的には今日の新劇運動よりも一層大仕掛けであつて、有力なる繙紳しんしん貴女を初め道学先生や教育家までが尽く参加した。当時の大官貴紳は今の政友会や憲政会の大臣よりも遙はるかに芸術的理解に富んでいた。

野の政治家もまた今よりは芸術的好尚を持っていた。かつ在官者よりも自由であつて、

大抵操觚^{そうこ}に長じていたから、矢野龍溪の『経国美談』、末広鉄腸の『雪中梅』、東海散士の『佳人之奇遇』を先駆として文芸の著述を競争し、一時は小説を著わさないものは文明政治家でないような観があつた。一つは憲法発布が約束されて政治が休息期に入つたからだが、一つは当時の欧化熱が文芸を尊重する欧米の空気を注入して、政治家もまた靖献遺言的志士^{かたぎ}形氣を脱してジスレリーやグラッドストーン、リットンやユーゴーらの操觚者と政治家とを一身に兼ねる文明的典型を学ぶようになったからだ。政治家肌がこういう傾向になつたのもまた間接に伊井公侯の文明尊重に負うているので、当時の政界の領袖は朝野を通じて皆文芸的理解に富んでいた。庄屋様上りの百姓政治家は帝都の中央では対手^{あいて}にされなかつた。

由来革命の鍵はイツデモ門外漢の手に握られておる。政治上の革命がしばしば草沢の無名の英雄に成し遂げられるように、文芸上の革命もまた往々シロウトに烽火を挙げられる。京伝馬琴以後落寞として膏^{あぶら}の燼^つきた燈^{とも}火^{しび}のように明滅していた当時の小説界も龍溪鉄腸らのシロウトに新しい油を注ぎ込まれたが、生残つた戯作者の遺物どもは法燈再び赫灼として輝くを見ても古い戯作の頭ではどう倣^しようもなく、空しく伝統の圈内に彷徨して指を啣^{くわ}えて眼を白黒^{しろくろ}する外はなかつた。中には戯文や駄洒落の才を頼んで京伝三馬の旧套

を追う、あたかも今の歌舞伎役者が万^{まんざら}更時代の推移を知らないでもないが、手の出しようもなくして歌舞伎年代記を繰返していると同じであつた。が、大勢は終に滔々として渠らを置き去りにした。

かかる折から卒然^{くつぎ}崛起して新文学の大旗^{たいはい}を建てたは文学士春^{はる}廼^の舎^{やおほろ}臚^ろであつた。世間は既に政治小説に目覚めて、欧米文学の絢爛莊重なるを教えられて憧憬^{あこが}れていた時であつたから、彼岸の風を満帆に舥^はませつつこの新しい潮流に進水した春廼舎の『書生氣質』はあたかも鬼ガ島の宝物を満載して帰る桃太郎の舟のように歓迎された。これ実に新興文芸の第一声であつて、天下の青年は翕^{きゆうぜん}然として文学の冒険に志ざした。

当時の記憶は綿々として憶浮べるまゝを尽くいおうとすれば限りがない。その頃一度は政治家たらんと欲し、転じて建築に志ざし、再転して今度は実業界に入ろうとした一青年たる自分が文学に興味を持つようになったのもまた、直接には龍溪鉄腸らの小説、間接にはこれらの新傾向を胚胎した英国の政治家的文人の典型であつた。幸か不幸か知らぬが終に半生を文壇の寄客となつて過ぎしたのは当時の青春の憧憬に発途しておる。

井侯の欧化政策は最早夢物語となつた。当時の記念^{かたみ}としては鹿鳴館が華族会館となつて幸い地震の火事にも無事に免かれて残つてただけだが、これも今は人手^{ひとで}に渡つてやがて取^と

毀^{りこぼ}たれようとしている。井侯^{ここう}薨去当時、故侯の欧化政策は滑稽の思^{おも}出^{いで}草^{ぐさ}となつたが、あらゆる旧物を破壊して根底から新文明を創造しようとした井侯の徹底的政策の小氣味よさは事毎に八方へ氣^き兼^{かね}して※咀^{しそ}逡^{しゆん}巡^{じゆん}する今の政治家には見られない。例えば先祖から持ち伝えた山を拓いて新らしい果樹園を造ろうとしたようなもので、その策は必ずしも無謀浅慮ではなかつたが、ただ短兵急に功を急いで一時に根こそぎ老木を伐採したために不測の洪水を汎濫し、八方からの非難攻撃に包圍^{つゐ}されて竟^{つゐ}にアタラ九仞の功を一簣に欠くの失敗に終つた。が、汎濫した欧化の洪水が文化的に不毛の瘠土に注いで肥饒の美田となり、新たに植樹した文明の苗木が成長して美果を結んだのは争えない。少くも今日の新しい文芸美術の勃興は当時の欧化熱に負う処があつた。

井侯以後、羹^{あつもの}に懲^こりて膾^{なます}を吹く国粹主義は代る代るに武士道や報徳講や祖先崇拜や神社崇敬を復興鼓吹した。が、半化石し掛つた思想は耆^き婆^ば扁^{へん}鵠^{かく}が如何に蘇^{よみ}生^{みがえ}らせようと骨を折つても再び息を吹き返すはずがない。結局は甲冑の如く床の間に飾られ、弓術の如く食後の腹^{もて}ごなしに翫^{あそ}ばれ、烏帽^{えぼし}子直^{ひたれ}垂^{たれ}の如く虫^{むし}干^{ぼし}に昔しを偲^{しの}ぶ種子となる外はない。津浪の如くに押寄せる外来思想は如何なる高い防波堤をも越して日一日も休みなく古い日本の因襲の寸を削り尺を崩して新らしい文明を作りつつある。この世界化は世界の進歩の

当然の道程であつて、民族の廢頽でもなければ国家の危険でもないのである。

イツの時代にも保守と急進とは相對立して互に相反撥し相牽掣する。が、官僚はイツでも保守的であつて、放縱危激な民論を控制し調節するが常である。官僚が先へ立つて突飛な急進の空氣を醸成して民間から反對されたというは滅多に聞かない話であつて、伊井公侯の欧化政策は平和的ポリシェウイズムであつた。それから比べると今日はあんまり平凡過ぎる。官僚も民間も皆老衰してしまつた。政治界でも実業界でも爺さんでなければ夜も日も明けない老人万能で、眼前の安樂や一日の苟安を貪る事無かれ主義に腰を叩いて死慾ばかり渴いている。女学校を出たてのお嬢さんが結婚よりも女の独立を主張し、五十六十のお婆さんまでが洋服を着て若い女と一緒に参政權を絶叫し、台所のお爨どんまで時間制を高唱して労働運動に参加しようとする今日の思潮は世間の大勢で如何ともする事が出来ないのを、官僚も民間も切支丹破天連の如く呪咀して、惴々焉としてその侵入を防遏しようとしておる。当年の若い伊井公侯なら恐らくこれを危険視する事は豈夫あるまい。伊井公侯の欧化策は文明の皮殻の模倣であつたが、人心を新たにし元氣を横溢せしめて新らしい文明のエポックを作つた。頓挫しても新らしい文化の種子を播いたのは争えない。当時の公侯の文化主義は終に曾我の家式滑稽として終つたが、シカモこの喜劇は極

めて尊い滑稽であつた。

（大正十四年三月再記）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「きのふけふ」博文館

1916（大正5）年3月

※初出時の表題は「三十年前」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

四十年前

——新文学の曙光——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 内田魯庵

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>